

テンテンコウシ・隠岐郡西ノ島町波止

令和3年3月9日掲載予定

収録・解説・酒井 董美<sup>たまたま</sup> イラスト・福本 隆男



[https://kanbenosato.com/minwaz/kancho\\_201710.html](https://kanbenosato.com/minwaz/kancho_201710.html)



語り手 手銭ユキさん（明治30年生まれ）  
収録・昭和51年4月17日

あらすじ

昔。ある田舎の荒れ寺があり、いくら和尚さんが座られても亡くなつてしまします。そのうちある偉い和尚さんが回つて来られました。「自分がそのお寺に座つてみつけん」。村の人々は、「あんたが座られても、見えなくなつけん」とめても、「自分が元気でおつたら、明日の朝、鐘たたくけん、あんたらつちや上がつて来い」と和尚さんは、寺へ入りました。

夜中の一時ごろ、「テンテンコウシ、内んですか」  
「あんた、どなたか」  
「トウヤノバトウとは、いかに、いかに」  
「それは東の野原にいる馬の化けたやつだ。下がれ」。

それで、音がしなくなりました。また一時間すると、「テンテンコウシ、内んですか」  
「はい」  
「ホクチクリンイチガンサンゾクケイとは、いかに、いかに」

「おまえは北の竹山の中にいる目の一つある、足の三本ある

る鶏の化けたやつだ。下がれ」。

それでまた切れました。それから一時間ほどしすると、「テンテンコウシ、内んですか」  
「内におる」  
「ナンチノタイリギヨとは、いかに、いかに」  
「おまえは南の池の中にいる大きな鯉の化けたやつだ。下がれ」。

それで、また切れました。さらに一時間たちました。また、  
「テンテンコウシ、内んですか」  
「内におる」  
「テンテンコウシとは、いかに、いかに」  
「おまえは、この寺の建つとき使つたジョウバン（大きな木槌）だ。それがこの上の方に取つてんに、その化けたやつだ。下がれ」。

それで切れてしまいました。朝になつて、村人たちが、「昨日の坊さんは、死んだだらあ」と言っていますと、鐘がガンガン鳴りました。見れば和尚さんが、おいでおいでと手招きしています。村人たちは、みんなやつて来ました。

そして、東野の馬頭の方へ行きますと馬の頭があり、持つて帰りました。また、北

の竹林へ行くと鶏の一つ目の足の三本あるやつがコツコツいついていたので、持ち帰り、南の池の中を掻き出したら大きな鯉がおり、それを持ち帰つて、みんなで料理し、寺の屋根裏に残されていたジョウバンも、料理をするときに燃やしてしまいました。そして、酒肴で祝つて、喜んだということでした。

解説

これは関敬吾『日本昔話大成』では、本格昔話に属し、「愚かな動物」の中の「化物問答」として、全国的に分布している。音読の名前を訓読に読み替えれば、化け物の正体は分かる仕組みになっている。多くは化物を退治した和尚さんが、その後、この寺の住職に納まるという筋書きになつているが、この西ノ島町の話では、そこまでは語られていない。テンテンコウシは「テンテン小槌」の転化かと思われる。（元島根大学法文学部教授）